

# 『方便から真実へ　浄土真宗』より抜粋

238 信前と信後とはどこで分別、区別をするのですか。

解説||これは第十八願の成就文を体験した人にのみ語られる、極意であります。これは学問でもなければ理屈でもない、実地に凡智がつきて仏智を体験さしていただいた、不思議の境地に入つた人のみの語られる世界であります。

信前とは、凡智の計らいのやまない、無明の闇を闇とも知らないで計らうて、死後の往生を楽しんでありがたがつている境地であり、信後とは、思慮分別がつきて、親に計らわれて明信仮智の大自覚を得た後をいうのであります。

信前とは、自分の機を抜きにして法をありがたがつてているときであり、信後とは、逆誂の屍が攝取された一刹那以後をいうのであります。

信前とは、三毒の煩惱は往生の邪魔にならないと落ちついておれるときであり、信後とは、無常觀と罪惡觀に攻めたてられて三定死の境地に立つて、実機が救われた後であります。

信前とは、自分は宿善が厚いから助かっていると自惚れている間であり、信後とは、難中の難を突破させていただいて、懺悔あるのみの世界であります。

信前とは、法を見て安心している境地であり、信後とは、この機が攝取されて満足してい る境地であります。

信前とは、信前信後の水際の立たない人であり、信後とは、鮮やかに信前信後の語れる人であります。

信前とは、未来を喜ぶ人であり、信後とは、現在を喜ぶ人であります。

信前とは、後生の一大事といいながら、ちょっとも真剣にならない人であり、信後とは、前滅後生に驚いて今開発し苦抜けした人であります。

信前とは、成就の文を読んで理解して落ちついておれる人であり、信後とは、言葉の理解でなく、親の念力を体験して大慶喜をした人であります。

成就文の話を聞いてありがたがっているのは、観念の遊戯ですよ、ほんとうに信心歡喜しましたか。一念とは信楽開発の時剋の極促を顕し、広大難思の慶びを彰わすと教えてあります。聞即信の一念で五十二段を超証としていただくのですが、あなたの機は晴れて満足していますか。理解は信仰ではありませんよ、素直にきいているのは感情ですよ、久遠劫から流転をしている実機は表には出ていませんよ。秘密の部屋で昼寝をしていますよ。三毒の煩惱のような簡単なものと思っていますか。絶対の法を何十年聞かされても絶対の機が顯れていないから、一体になつていないのでですよ。一体になつていながら、撮取されてはいな

いのです。成就文は、聞即信の一念で信順した者は救われると法が成就したのであって、あなたは信順したのでなく合点したのだから、摄取されてはいないのでですよ。成就の文から洩れていますが、あなたの本性の逆説の屍ではありますか。除かれているのですよ、その機があわてたときでなければ、あなたの信仰にはなりませんよ。逆説の屍とは五逆と謗法と闡提、闡提を無信と訳し、脈があがっているから屍というのです。地獄と聞かされても、痛くもなれば痒くもない、極樂と聞いても、ありがたくもなければ嬉しくもない、合羽が水をはじいているのと同様で、驚きを立てないから難化の三機、難治の三病というのです。それがあなたの自体であるけれども、素直に聞いていると頭にのぼっているから、自分のことだと気がつかないのです。光明無量に照らし抜かれて唯除逆説と捨てられたのが私であつたと捨てられた人が、寿命無量の慈悲の極致の若不生者不取正覺に生かされたのが、至心信樂己を忘れた大慶喜をするのです。それを成就の文に、至心に廻向したまえり、誰だれ

に廻向してくださつたか、諸の衆生に、諸の衆生の腹わたは逆謗の屍、それに、至心に廻向してくださつた、何を、法体の大行の名号を、同時に当果決定を、名号を聞き開いたと同時に未来の往生まで廻向してくださつた、聞即信の一念に即得往生さしてくださると知つたのが、信前、くださつて飛び上つて大慶喜をしたのが、信後です。自分の罪業深重を見ていない人は畳の上の水練、机上の空論、観念の遊戯で、なるほどと理解しただけですから、信前というのです。実地に生死の苦海に投げ込まれた実感があつたか、ほんとうに九死に一生を得た人なら大慶喜するのです。後生が一大事になつて三定死の境地に立つた人が、我能く汝を護らんの勅命が五臟六腑を貫いたとき、天地が転倒するほどの大慶喜、ふたたび迷わぬ身にさしていただき大自覚、聞即信の一念で十方法界の功德を全領さしていただいたのですから、凡智がつきて仮智に生かされているのです。鮮やかも鮮やか、これほど鮮やかなものはないから明信仮智といい、いまこそ明らかに知られたりと仰せられたので、やかなものはないから明信仮智といい、いまこそあき

一念の信を諦得さしていただいた人が、信前信後の水際が立つのです。立たない人は、信前にいる人です。

### 『昭和の歎異鈔』より抜粋 273頁

真とは眞実、本物、如実の信、信後の味、第十八願の他力不思議の信ということで、仮とは、権仮、方便、贋物、真似、不如実の信、信前の味ということで、第二十願の信仰ということです。

分際とは区別、分別、たてわけ、水際、角目、境目ということで、第十八願の信と第二十願の信は、法は他力の名号ですけれども、機の見方が違うのです。照らし出されて逆誇の屁が

自分であつたことに驚いて、黒血を吐く思いで求道し、火原の中をさ迷うて往生の望みの絶えた劣機が自分であつたと投げ出した機が、第十八願の正所被の機で、自分は素直に聞いていると自惚れて、実地の求道を他人にさして、実機を包んでいて、死んだらお助けと思つているのが、第二十願の相手の機です。

言葉を変えて言えば、第十八願の方は極悪最下の実機が、信樂開発さされて、明信仏智の無我の信仰が諦得できた信後のことであり、第二十願の方は素直に聞いていると実機を包んで、疑いを疑いと知らないのですから疑惑仏智で、ありがたい真似をしている贋物の信仰ですから、この世で往生の解決がついていないから、この世ではどうもなれない、死んでからお助けと言つてゐるのです。晴てはいなければ、永年聞かされて理屈が判つてゐるから、何時とはなしに晴れたつもりでいるから、真偽の分際はいつとはなしにえられると言つてゐるのです。しかし、真がわからないのに偽がわかるはずがなく、偽のわからないのに真

のわかるはずがないから、聖人は「真仮を知らざるによりて如來廣大の恩徳を迷失する」といわれたのです。

## 『廣大難思の大慶喜』より抜粹 165頁

真仮の水際の立たないのが二十願

名号を眺めているのが方便の第二十願で信前の機、名号と一体になつたのが真実の第十八願の信後の機である。方便から真実に入るのが真似から本物、贋物から本物、調熟の光明から摄取の光明に生かされるので、初めから真実の者はいません。方便にいる間は真実は判らないのです。真実に入つてこそ 長い冥路を迷うていた事が判るのです。方便とは、他力回向と言ひながら凡夫の計らいがやまないのでですから、いくら他力のように説明して贋てみ

ても、自心建立の心の域を離れることが出来ないであります。

## 174頁

真宗では機の見方が足りないので。心の中にどんな化け物が隠れているか、ご承知ですか。それが臨終でなければ見えてこないので。その厄介な心の古狸を、元気な達者な間に照らし出してもらつて、弥陀の利剣で退治してもらえ、というのが平生業成というのですよ。平生とは臨終ではない、達者な元気な間、業成と業事成弁という専門語だから、私が説明すれば一大事業が完成する、望みが叶う、一大事業が達成できる、ということです。人間は無限の欲望があるから、満足を知らない。金でも、名誉でも、地位でも、有ればあるほど欲をおこす。それが一場の夢にすぎないので、そらごと戯言に気がついた時は、つぎの世界に出ているのです。早く精神的大満足を得て、人生に受生した有意義な生活をせよということです。

人間は、樂を求めるながら苦しんでいるのです。光に向いて進めば、物質の影法師はついて来るのです。光を背にして、物質や名利の影法師を追えば追うほど、走れば走るほど、まだ足りない、まだ足りないと追わねばならないのです。その根本は、無明の闇の心があるのです。秘密の部屋にがんばっている化け物は、真宗で教えている三毒の煩惱のような簡単な代物ではありませんよ。十八願から洩れた代物が五逆、謗法、闡提、邪見、憍慢、弊、懈怠、私が調べただけがこの七つですが、こんな心はたびたび説明していますから、今は略します。こんな心のあることさえも知らず、素直に聞いていると平氣でいるのですから、宗教を聞く器ではないのです。絶対の機が照らし出されていなければ、絶対の法とピントが合わないから一体になれないのです。

機を見るのを嫌うのが二十願の人で、真実の機が照らし出されて名号と一緒にさしていただいたのが、第十八願の行者です。眞実の機とは、眞實に二通りがあります。仏の眞実は

真実が真実、凡夫の真実は嘘が真実です。凡夫の真実は、真実のないのが真実です。絶対の不実が知らされた人でなければ、仏の真実に救済された慶びはありません。実機を知らないのが、自惚れ強い第二十願の信前の贋物の信仰です。